

『サーダナ・マーラー』における2種の五護陀羅尼マンダラ¹

園田 沙弥佳

1. 五護陀羅尼とは

五護陀羅尼 (Pañcarakṣā パンチャラクシャー) とは、インド密教において『大随求陀羅尼』 *Mahāpratisarā*、『守護大千国土經』 *Mahāsāhasrapramardanī*、『孔雀王呪經』 *Mahāmāyūrī*、『大寒林陀羅尼』 *Mahāsītavaṇī*、そして『大護明陀羅尼』 *Mahāmantrānusāriṇī* の5種の陀羅尼經典、およびそれらの經典が神格化された女神のグループを示す。各經典は3～7世紀の初期密教時代²にそれぞれ単独で成立し、主にネパール、チベット、中国、日本等に広まった。『孔雀王呪經』の原型が最も早く、『守護大千国土經』が最も後代に成立したものと考えられている。

各明妃は遅くとも7、8世紀までに各々単独で神格化されたと推測されている³。陀羅尼はサンスクリット語で *dhāraṇī* と示され、主に女尊として神格化することが多い。五護陀羅尼もまたそれぞれ女尊として神格化された。『大随求陀羅尼』は「大随求明妃 (マハープラティサーラー)」等と呼ばれる。日本では「大随求菩薩」等の名称で知られており、京都清水寺随求堂等が有名である (図1 参照)⁴。同様に、『守護大千国土經』は「大千摧碎明妃 (マハーサーハスラプラマルダニー⁵)」、『孔雀王呪經』は

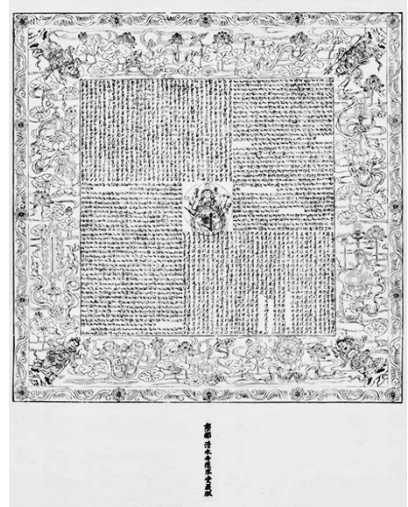


図1. 京都清水寺蔵版「随求陀羅尼」

1 本論文は平成30年度東洋大学井上円了記念研究助成による研究成果の一部である。
2 初期密教時代は年代的に3～7世紀中頃までと比較的間隔があるが、大塚氏 [2013] はこれを3期に分割した。そのうち第1期 (3～5世紀中頃) の陀羅尼は、大乘の空思想や陀羅尼思想から展開した「密教系グラニ經典」と、小乗部派のバリッタ (護呪) から展開した「密教系護呪經典」に分類できるという。後者には五護陀羅尼のうち、『孔雀王呪經』『大寒林陀羅尼』の成立に関係した經典が含まれる。また、第3期 (6世紀後半～7世紀前半) には『大随求陀羅尼』の類本が新出しているという。
3 [立川2009]
4 清水寺随求堂では2018年の春と秋に、秘仏の大随求菩薩坐像が222年ぶりに公開された。境内善光寺堂で発見された「随求陀羅尼」の版木が随求堂内で展示された。版木から印刷された「大随求陀羅尼」は秘仏公開期間中に数量限定で販売され、筆者は10月12-13日に、平成30年度井上円了記念研究助成にて現地調査に赴き入手した。「大随求陀羅尼」は中央に大随求菩薩の尊像、周囲には『大随求陀羅尼』の經文が記されてマンダラ様になっている。『大随求陀羅尼』は唐代宝思惟訳と不空訳の2種類が存在しており、清水寺随求堂蔵版「大随求陀羅尼」には「普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大随求陀羅尼經」と記されていることから、清水寺では不空訳の『大随求陀羅尼』が伝わっていたことがわかる。また、大随求菩薩の周囲に書かれている經文は、上記の經題から始まって梵字の經文が続き、末尾には「法界諸衆生平等利益證妙果」と記されている。梵文の内容については今後精査する。

「孔雀明妃（マハーマーユリー）」、『大寒林陀羅尼』は「大寒林明妃（マハーシータヴァティー⁶）」、そして『大護明陀羅尼』は「密呪随持明妃（マハーマントラヌサーリーニー⁷）」等と呼ばれている。インド後期密教の時代になると、それぞれ単独で成立していた五護陀羅尼明妃は一括されて「五護陀羅尼マンダラ」として展開した。

2. 金剛界五仏と五護陀羅尼マンダラ

11～12世紀にインドの学匠アバヤーカラグプタ Abhayākara Gupta によって編纂された成就法の集成である『成就法の花環』*Sādhnamālā* (略号 SM) No.201, 206や『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī* (略号 NPY) No.18、チベットで19世紀に再編された『西藏マンダラ集成』*rGyud sde kun btus* (『タントラ部集成』、略号 GDK)⁸ No. 5 には、五護陀羅尼明妃の成就法や5尊を中心とするマンダラの記述が見られる。また、五護陀羅尼の写本で各明妃の姿が挿絵として描かれることもある。

五護陀羅尼が神格化した際、宝冠にある化仏や方位、体色や乗り物等といった図像的特色から、金剛界マンダラにおける金剛界五仏（以下、五仏と称す）との関連性が見いだせる場合がある。金剛界マンダラとは、インド中期密教にあたる7世紀後半～8世紀頃までに成立したといわれる『金剛頂経』系の『初会金剛頂経』「金剛界品」の冒頭に説かれていた金剛界大曼荼羅（成身会）を指し、金剛界系のマンダラの基本パターンを表す⁹。

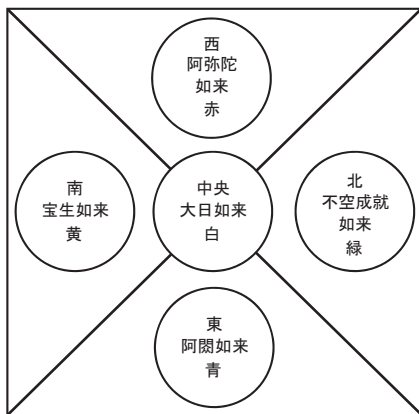


図2. 金剛界曼荼羅の五仏の配置

五仏は特にネパール密教図像において中心的な存在であり¹⁰、大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来の五尊を指す。金剛界マンダラにおける各尊格の位置する方向は、大日如来が中央、阿閼如来が東、宝生如来が南、阿弥陀如来が西、そして、不空成就如来が北に位置することが多く（図2参照）¹¹、獅子、象、馬、孔雀、ガルダに各々座す例もある。

以下の図3～6は、14世紀頃の五護陀羅尼写本の一部である。これらの図には神格化した五

5 NPY No.18では「マハーサーハスラブラマルディニー」*mahāsāhasrapramardīnī*と表記されるが、本論文では特に記述がない限り「マハーサーハスラブラマルダニー」*mahāsāhasrapramardanī*に統一する。

6 SM No.200, 201, 206では「マハーシタヴァティー」*mahāsitavatī*と表記されるが、本論文では特に記述がない限り、「マハーシータヴァティー」*mahāśītavatī*に統一する。

7 SM No.206では「マハーマントラヌサーリーニー」*mahāmantranūsārīnī*、[Bhattacharya 1968b]では「マハーマントラヌダハラニー」*mahāmantrānūdhāraṇī*と表記されるが、本論文では特に記述がない限り、「マハーマントラヌサーリーニー」*mahāmantrānūsārīnī*に統一する。

8 GDK, No. 5 五護陀羅尼マンダラの基本テキストは以下のとおりである。Ota, No.179, Toh.No.561 [立川2009: 135]

9 [田中2004: 123-131]

10 [田中・吉崎1998: 147]

11 [田中2004]を参照に筆者が作成した

護陀羅尼明妃が挿絵として描かれている。大随求明妃は白い体色で獅子の上に座し、大日如来の図像的特徴と共通している(図3)。以下同様に、孔雀明妃は黄色い体色で馬に座し宝生如来と(図4)、大寒林明妃は緑色の体色でガルダに座し不空成就如来と(図5)、密呪随持明妃は赤い体色でクジャクに座し阿弥陀如来と(図6)それぞれ関連している¹²。



図3. 大随求明妃(大日如来) 14世紀頃、東インド、パレンドラ・プーミ派
(東京国立博物館 2015: 131)



図4. 孔雀明妃(宝生如来) 14世紀頃、東インド、パレンドラ・プーミ派
(東京国立博物館 2015: 127)



図5. 大寒林明妃(不空成就如来) 14世紀頃、東インド、パレンドラ・プーミ派
(東京国立博物館 2015: 129)



図6. 密呪随持明妃(阿弥陀如来) 14世紀頃、東インド、パレンドラ・プーミ派
(東京国立博物館 2015: 130)

12 本写本の大千摧碎明妃の挿絵は未見である。他の五護陀羅尼明妃4尊の体色と乗り物から推察すると、大千摧碎明妃は青い体色で象の上に座した阿闍如来と対応している姿であると思われる。

五護陀羅尼マンダラと五仏の対応関係に関する主な先行研究は以下のとおりである。まず [Bhattacharya 1968b: 243-244] では、大随求明妃が単独で信仰される時は宝生如来、他の五護陀羅尼明妃と併せてマンダラとして信仰される場合は大日如来を化仏とする、と言及されている。次に [立川1987: 111] では、五護陀羅尼の各明妃の特色は明かに五仏と共通し、大日如来の特色を持つ大随求明妃を中尊とする五護陀羅尼マンダラの特色はチベットの伝統によるものである、と述べられている。[田中1992: 148] では、マンダラ内庭の塗り分け方から、五護陀羅尼マンダラが金剛界マンダラの五仏と方位の上で対応していると述べた上で、そもそも五護陀羅尼各明妃は単独で成立し、後に一括され五仏と関連付けられて解釈されるようになったため、対応関係は諸説があって一定していない、と言及している。

近年の研究として、[Lewis2000: 133] では、大随求明妃の図像的特徴は大日如来に従っている、と述べられる。また、[木村2018] では、宝思惟訳『大随求陀羅尼』と NPY No.18「五護陀羅尼マンダラの章」を比較している。宝思惟訳に見られる大随求明妃の体色は黄色、右手に与願印をなし、左手に金剛杵を持っているという点で、NPY No.18に見られる大随求明妃の尊容と矛盾しない、としている。なお、木村氏の論文で宝生如来との対応については言及されていないが、大随求明妃の体色として表現される黄色は宝生如来のものと同じである。

以上の先行研究によると、大随求明妃を中尊とした五護陀羅尼マンダラの様相には2つのパターンが指摘されている。第1に、大随求明妃の化仏が宝生如来もしくは体色が黄色で、宝生如来と関連した特色を有するもの (SM No.201、NPY No.18、[Bhattacharya 1968b: 243-244] [木村2018])、第2に、大随求明妃の化仏が大日如来もしくは体色が白色で、大日如来と関連した特色を有するもの (SM No.206、GDK No 5、[立川1987: 111]) である。本論文では便宜上、前述の第1の特徴を持つ五護陀羅尼マンダラを「宝生如来系」、第2の特徴を持つ五護陀羅尼マンダラを「大日如来系」と称す。先行研究ではこれら2種のマンダラ成就法の比較に関して具体的に言及されていない。本論文では先行研究を踏まえ、SMの記述を中心に五護陀羅尼マンダラの特色を明らかにする。

3. 『サーダナマーラー』における五護陀羅尼成就法

「成就法」(サーダナ, *sādhana*) とは、特定の尊格あるいはマンダラを観想、すなわち仏のイメージを眼前に表して、行者と尊格が一体となる行為を主体とした行法である¹³。インド密教の学匠アバヤーカラグプタ *Abhayākara Gupta* によって11~12世紀頃に編纂された¹⁴ 『成就法の花環』 *Sādhnamālā* (略号 SM) は『成就法集』 *Sādhanaśamuccaya* とも呼ばれ、

13 [奥山2006: 173]

14 [奥山2006: 178] [佐久間2011: 17]

成就法を集大成した文献の一つである。バツタチャリヤの校訂本¹⁵では、如来や観音などの尊格ごとにグループ分けされて収録されている。

五護陀羅尼に関係する成就法は、各明妃が単独で説かれる No.194~200と、5尊が一括されたマンダラが説かれている SM No.201, 206が該当する。それらの中で、No.195「大随求明妃成就法」および No.206「五護陀羅尼成就法」は比較的儀軌の内容が詳しく説かれ、

構成が理解しやすい。一方、No.194, 196~201は各明妃の図像的特徴が次第の大部分を占めている¹⁶。次項では、先行研究で指摘されている宝生如来系と大日如来系の五護陀羅尼マンダラについて、五護陀羅尼と五仏の図像的特徴と照らし合わせながら SM の記述を見ていく。なお、本稿で使用したバツタチャリヤ校訂本と東大写本 (Matsunami 1965)、National Archives, Kathmandu, No.3-387 (以下略号 NAK と称す)、ならびにチベット語訳 (Toh., Ota.) の対応関係は表 1, 2 に示す¹⁷。

SM No.	対応する五護陀羅尼明妃	No.451	No.452	No.453	NAK
194	大随求明妃	150 a6	108 b3	155 a4	164a8
195	大随求明妃	150 b4	108 b8	155 b3	164b7
196	大随求明妃	151 b1	109 a9	156 a6	165b3
197	孔雀明妃	151 b6	109 b6	156 b6	166a4
198	大千摧碎明妃	152 a4	110 a1	157 a4	166a11
199	密呪随持明妃	152 a5	110 a3	157 a6	166b3
200	大寒林明妃	152 b1	110 a4	157 b1	166b6
201	5尊 (マンダラ)	152 b2	110 a6	157 b2	166b9
206	5尊 (マンダラ)	153 b5	111 a5	159 a1	168a5

表 1. SM バツタチャリヤ校訂本 (Bhattacharya 1968a) およびサンスクリット写本 ([Matsunami 1965] No.451~453, NAK) に見られる五護陀羅尼の成就法対照表

SM No.	Toh. I	Toh. II	Toh. III	Toh. IV	Ota. I	Ota. II	Ota. III	Ota. IV
194	3251	3376	3583	3119	4074	4197	4405	3940
195			3584				4406	
196			3585				4407	
197	3252	3378	3586	3120	4075	4199	4408	3941
198	3253	3379	3587	3121	4076	4200	4409	3942
199	3254	3380	3588	3122	4077	4201	4410	3943
200	3255	3381	3589	3123	4078	4202	4411	3944
201	3256		3590		4079		4412	
206			3596				4418	

表 2. SM バツタチャリヤ校訂本 (Bhattacharya 1968a) およびチベット語訳 (Toh., Ota.) に見られる五護陀羅尼成就法対照表

15 [Bhattacharya 1968a]

16 [頼富・下泉1994: 40] によると、尊格との合一を図るためには具体的な尊格の姿が必要であり、成就法によっては図像規定のみが要点として記述されることがあるという。

17 [吉崎1980] および [塚本、松長、磯田編1989] を参考に筆者が作成した。

3.1 宝生如来系五護陀羅尼マンダラ

3.1.1 SM No.201五護陀羅尼マンダラの図像的特徴

本成就法と No.206は五護陀羅尼各明妃 5 尊全員の姿が説かれている。詳細に説かれている No.206に対し、No.201は主に図像の規定が大部分を占めている。

まず、大随求明妃は体色が黄色で、三面十臂の女神である。中央の面は黄色で、左右はそれぞれ黒（青）と白である。右の五臂に劍、金剛杵、矢、与願印を結び、心臓の近くで傘を手に持つ。左の五臂には弓、旗、宝石の山、斧、法螺貝を持つ。宝生如来の王冠¹⁸を被り、青黒い鎧兜と赤い上着を着け、半跏遊戯坐に坐し、光り輝く装飾品で飾られる。孔雀明妃は体色が緑で一面二臂、光り輝く孔雀の尾羽を持ち、与願印を結ぶ。密呪随持明妃は一面四臂で体色が黒の女神である。右の臂には劍を持ち、与願印を結ぶ。左の臂には斧、縋索を持つ。大寒林明妃は一面四臂の女神で、体色は赤く、右の臂には劍を持ち、与願印を結び、左の臂には斧、縋索を持つ。なお、大千摧碎明妃は前述したような明妃と述べられており、具体的な内容は示されていないが、この明妃単独の成就法が説かれている SM NO.198を指していると推察される。

以上が No.201に見られる五護陀羅尼明妃の図像的特徴である。本マンダラは中尊である大随求明妃が宝生如来の冠を身につけていることから、宝生如来系の五護陀羅尼マンダラといえる。

3.1.2 五護陀羅尼明妃単独の成就法 SM No.194～200の図像的特徴

前述の SM No.201では大随求明妃の宝冠に宝生如来が観想される以外に、他の四尊に対応する五仏の名は説かれていない。一方で、五護陀羅尼明妃単独の成就法 SM No.197～200では、各々の明妃が五仏に関連付けられた冠を身につけていることが説かれている。具体的には、孔雀明妃は緑の体色で不空成就如来の王冠¹⁹（SM No.197）、大千摧碎明妃は白い体色で大日如来の王冠²⁰（SM No.198）、密呪随持明妃は青黒い体色で阿闍如来の王冠²¹（SM No.199）、そして大寒林明妃は赤い体色で阿弥陀如来の王冠²²（SM No.200）をそれぞれ観想する。また、各明妃の体色が No.197～200と201で共通している。

SM No.201には各明妃の位置する方角の記述はないものの、NPY No.18「五護陀羅尼マンダラの章」で説かれている五護陀羅尼明妃の図像的特色は、SM No.201および SM No.197～200と共通している。NPY の記述では、中央に黄色い大随求明妃、東に白い大千摧碎明妃、南に青黒い密呪随持明妃、西に赤い大寒林明妃、北に緑色の孔雀明妃を観想す

18 ratnasambhava-mukutī

19 amoghasiddhi-mukutām

20 vairocana-kirīṭa-mukutām

21 akṣobhya-kirīṭinī

22 amitābha-mukutī

る。NPY で述べられているそれぞれの明妃の体色と共通することから、SM No.197~200, 201における各女尊の位置する方位も同様であると考えられる (以下図7参照)²³。

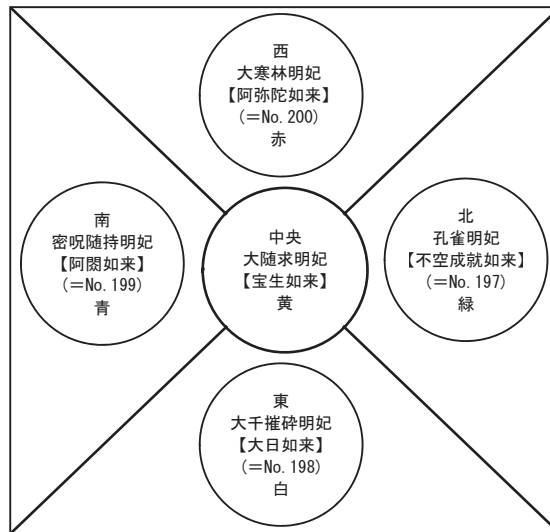


図7. 宝生如来系五護陀羅尼マンダラ (SM 201, NPY No.18)

【 】内は対応する五仏、()内はSMに述べられている単独の五護陀羅尼成就法のNo.である。

以上のことから、五護陀羅尼各明妃の単独の成就法のうち No.197~200は、中尊に宝生如来の特色を持つ五護陀羅尼マンダラの成就法 (SM No.201, NPY No.18) を基盤として制作された成就法と見られる。

なお、大随求明妃単独の成就法である No.194~196も黄色い体色で観想されるが、No.195以外は五仏に関連する記述はない。No.195には黄色い大随求明妃の族主として五仏の名があげられるが、ここで示されるのは宝生如来ではなく阿閼如来である。阿閼如来は8世紀の『秘密集会タントラ』や11世紀の『時輪タントラ』といったインド後期密教を代表とする経典において、大日如来に代わってマンダラの中尊となる例が見られることから、大随求明妃がインド後期密教で重要視されるようになった阿閼如来が宝生如来に代わって関連付けられるようになったと推察される。

3.2 大日如来系五護陀羅尼マンダラ

次に、SMに見られる大日如来系五護陀羅尼マンダラの成就法について述べる。中尊に大日如来の特色を持つ五護陀羅尼マンダラは、SM No.206が該当する。この成就法は五護陀羅尼マンダラの観想を中心に行う前半部と、実際のマンダラの制作及び供養を中心に行

23 [Bhattacharya1968b:398]、[Matsunami 1965] No.451~453 sādhanasamuccaya、National Archives, Kathmandu, No.3-387を参照し、筆者が作成した。

う後半部の2つの部分からなり、SMに述べられている五護陀羅尼の成就法の中で最も詳細に説かれている。本成就法の和訳および特色については〔園田2015〕等で発表したため、ここでは五仏の特色に関連する記述のみ述べる。

大随求明妃の体色は白色²⁴で、頭頂は仏塔で飾られており、金剛結跏趺坐に坐す。四面八臂で、中央の顔は白、右は青黒色、後部は黄色、左は赤色である。

続けて、大千摧碎明妃の観想が行われる。位置は大随求明妃の東で、体色は青黒色、黄褐色の髪を逆立てた女神で、人間の頭蓋骨で飾られ、眉を寄せて牙をむいている顔である。中央の顔が青黒、右が白、後部が黄色、左が緑で、すべての顔に三眼を備えている。

その後、孔雀明妃が観想される。位置は大随求明妃の南で、体色は黄色、結跏趺坐に座し、三面八臂である。中央の顔は黄色、右面は青黒色、左面は赤色をしている。

そして、密呪随持明妃の観想が行われる。位置は大随求明妃の西で、体色は白色²⁵、三面十二臂、中央の顔は白、右は青黒、左は赤色をしている。

最後に、大寒林明妃の観想が行われる²⁶。位置は大随求明妃の北で、体色は緑色、日輪の上に展右の姿勢をとり、三面六臂でそれぞれの顔に三眼を持つ。中央の顔は緑で、右は白、左は赤である。如来の化仏をつけた宝冠を被る。

以上がSM No.206の図像的特色である。本成就法には五仏に関する記述は見られない

が、五護陀羅尼明妃の体色や方位から、五仏にそれぞれ対応していると思われる(図8参照)²⁷。なお、本成就法の特色はチベットで19世紀に再編されたGDKに説かれている五護陀羅尼マンダラの図像的特徴と共通している。

以上に述べた五護陀羅尼成就法 No.194～201, 206における五仏の対応関係を、以下の表3にまとめる。参考として、SMと同時期に編纂されたNPY No.18「五護陀羅尼マンダラの章」、および、GDK No.5の図像的特徴を加えた。

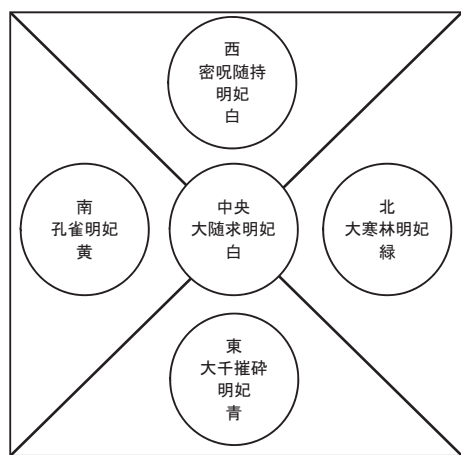


図8. 大日如来系五護陀羅尼マンダラ (SM No.206)

24 gaura には他に「白」「黄色」の意味もある。孔雀明妃(黄色)および密呪随持明妃の体色(白 śukla)に重複しないためにも大随求明妃の体色は「淡い赤」が適切かと思われたが、チベット語訳に「白 dkar po」とあるため、こちらを採用した。

25 (śukla)

26 本成就法で説かれる大寒林明妃の特色は、サンスクリット系統およびチベット語訳系統『大寒林陀羅尼』のうち、サンスクリット系統の影響を受けていると考えられる。詳しくは〔園田2017〕を参照。

27 [Bhattacharya 1968b:398]、[Matsunami 1965] No.451～453 sādhanasamuccaya、National Archives, Kathmandu, No.3-387を参照し、筆者が作成した。

	五仏 方位 / 体色	大日如来 中央 / 白	阿闍如来 東 / 青黒	宝生如来 南 / 黄	阿弥陀如来 西 / 赤	不空成就如来 北 / 緑
宝生如来系 五護陀羅尼 マンダラ	SM No.197 方位 / 体色 / 化仏					孔雀明妃 — / 緑 / 不空成就如来
	SM No.198 方位 / 体色 / 化仏	大千摧碎明妃 — / 白 / 大日如来				
	SM No.199 方位 / 体色 / 化仏		密呪随持明妃 — / 青黒 / 阿闍如来			
	SM No.200 方位 / 体色 / 化仏				大寒林明妃 — / 赤 / 阿弥陀如来	
	SM No.201 方位 / 体色 / 化仏	大千摧碎明妃 — / — / —	密呪随持明妃 — / 黒 / —	大随求明妃 — / 黄 / 宝生如来	大寒林明妃 — / 赤 / —	孔雀明妃 — / 緑 / —
	NPY No.18 方位 / 体色 / 化仏	大千摧碎明妃 東 / 白 / 大日如来	密呪随持明妃 南 / 青黒 / 阿闍如来	大随求明妃 中央 / 黄 / 宝生如来	大寒林明妃 西 / 赤 / 阿弥陀如来	孔雀明妃 北 / 緑 / 不空成就如来
大日如来系 五護陀羅尼 マンダラ	SM No.206 方位 / 体色 / 化仏	大随求明妃 中央 / 白 ²⁸ / —	大千摧碎明妃 東 / 青黒 / —	孔雀明妃 南 / 黄 / —	密呪随持明妃 西 / 白 ²⁹ / —	大寒林明妃 北 / 緑 / —
	GDK No.5 方位 / 体色	大随求明妃 中央 / 白	大千摧碎明妃 東 / 青	孔雀明妃 南 / 黄	密呪随持明妃 西 / 赤	大寒林明妃 北 / 緑
その他	SM No.194 方位 / 体色 / 化仏			大随求明妃 — / 黄 / —		
	SM No.195 方位 / 体色 / 化仏		大随求明妃 — / 黄 / 阿闍如来			
	SM No.196 方位 / 体色 / 化仏			大随求明妃 — / 黄 / —		

表3. 金剛界曼荼羅の五仏と SM, NPY, GDK における五護陀羅尼明妃の対応関係

4. 考察

先に述べた通り、五仏は金剛界マンダラにおいて、中央に白い大日如来、東に青（黒）い阿闍如来、南に黄色い宝生如来、西に赤い阿弥陀如来、北に緑色の不空成就如来が位置する。SM No.206の五護陀羅尼マンダラも、中央に大随求明妃、東に大千摧碎明妃、南に孔雀明妃、西に密呪随持明妃、北に大寒林明妃が位置しており、金剛界マンダラの特徴と一致している。体色に関しては密呪随持明妃の白い体色が中尊の大随求明妃と重複しており、五仏の特徴と比較すると異同はあるが、他の4尊の体色および方角は五仏と対応している。なお、典拠については明確ではないものの、[Lewis2000: 152-153] では密呪随持明

28 注24参照

29 注25参照

妃の体色は赤であると述べられており、この場合は五仏の特色と一致する。以上の位置関係はチベットに伝わる GDK の五護陀羅尼マンダラとも一致している。

一方、宝生如来系五護陀羅尼マンダラに見られる配置は NPY No.18 「五護陀羅尼マンダラ」の記述と共通している。Kim 氏 [2010: 270] によると、五護陀羅尼の写本に見られる挿絵の特徴から、SM No.194~200はインドの伝統、No.206はネパールの伝統に見られる特色を持つという。この Kim 氏の論文に SM No.201への言及はないが、2.1.2 で述べたとおり、No.201は No.197~200に関連した成就法であると推測できることから、同じく No.201もインドの伝統であると推測される。その場合、NPY No.18も同様にインドの伝統に則した記述といえるだろう。

以上のことから、SM や NPY に見られる五護陀羅尼の記述から、11世紀のインドには宝生如来系五護陀羅尼マンダラ (No.197~200, 201) と大日如来系五護陀羅尼マンダラ (No.206) が存在し、そのうち大日如来系がネパールやチベットで普及するようになったと考えられる。

付録. SM No.194, 196~201和訳

ここでは、『成就法の花環』に説かれている五護陀羅尼明妃の成就法のうち、SM No.194, 196~201の和訳を取り上げる (No.195は [園田2014a]、No.206は [園田2015] においてそれぞれ成就法の特色と和訳を発表した)。和訳に際して使用したテキストや参考文献は以下の通りである。なお、各和訳の見出しと冒頭に示される内容構成表は、いずれも筆者が作成したものである。

0. 使用テキスト

[サンスクリット・テキスト]

- A) Bhattacharya, Benoytosh, ed., *Sādhanaṃālā vol II, G.O.S. No.41*, Baroda Oriental Institute, Baroda, 1968

[サンスクリット写本]

- B) *Sādhanaṃsamuccaya* (東京大学所蔵 [Matsunami1965: No.451])
C) *Sādhanaṃsamuccaya* (東京大学所蔵 [Matsunami1965: No.452])
D) *Sādhanaṃsamuccaya* (東京大学所蔵 [Matsunami1965: No.453])
E) National Archives, Kathmandu, No.3-387

[チベット語訳]

- Ota. No.4074 སོ་སོ་འབྲང་མ་ཆེན་མོའི་སྐབ་ཐབས་ (SM No.194)

Ota. No.4407 སོ་སོར་འབྲང་མའི་རྒྱལ་ཐབས་ (SM No.196)

Ota. No.4075 མ་བྱ་ཆེན་མོའི་རྒྱལ་ཐབས་ (SM No.197)

Ota. No.4076 ལྷོང་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཛོམས་པའི་རྒྱལ་ཐབས་ (SM No.198)

Ota. No.4077 གསང་སྤགས་ཀྱི་རྗེས་སུ་འབྲང་བ་ཆེན་མོའི་རྒྱལ་ཐབས་ (SM No.199)

Ota. No.4078 བསེལ་བའི་ཆེན་མོའི་རྒྱལ་ཐབས་ (SM No.200)

Ota. No.4079 དེ་ནས་གངམས་ངག་གཞན་གྱི་ལྷ་ལྷེགས་པར་བསྟན་པར་བྱ་བ་ (SM No.201)

1. No.194 「大随求明妃成就法」和訳

[0] 帰敬偈

大随求明妃に帰依する。

[1] 核となる種字

以前話された方法によって空性を観想した直後に、ア
(a) 字から生じた月 [輪] において、黄色のプラム
(pram) 字から生じた他者のために作られた色々な種類の
光線を変化させて、大随求明妃を直ちに自分自身として
観想すべきである。

- | |
|--------------|
| [0] 帰敬偈 |
| [1] 核となる種字 |
| [2] 大随求明妃の観想 |
| [3] 3つの文字の布置 |
| [4] 真言 |

SM No.194

「大随求明妃成就法」内容構成

[2] 大随求明妃の観想

[その女神の体色は] 黄色で、四面八臂で三眼 [をそれぞれの面に持ち]、中央の顔
に黄色、右 [の顔] に白色、後ろ [の顔] に青色、左 [の顔] に赤色を [有してい
る]。右の臂によって剣、輪・三叉戟、矢を持ち、左の臂によって斧、弓、羅索、金剛
を持つ。二重蓮華の [上の] 月 [輪] の [上の] 座において遊戯坐で坐しており、赤
く輝いているマンダラ (日輪) のように、一切の装飾品で飾られたきらびやかな衣服
を身にまとい、白色の上着を着て様々な宝石の王冠 [をつけている]。

[3] 3つの文字の布置

そのように考えてから、その時、身口意の月輪において、オーム、アーハ、フーム
という白色と黄色と青色の3つの文字を観想すべきである。その時、乳房の間におい
て月輪の上にあるプラム字を考えて、様々な種類の女神たちによって自分自身を供養
されていると見てから、疲れが生じない程度に観想すべきである。

[4] 真言

疲れた時には、自身の心臓の月 [輪] において、最高の真珠の首飾りのような真言
を見ながら読誦すべきである。「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃
よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」 [以上が] 大随求明妃の成就法
である。

た時、堅固な心を持つ者は光線を放ち輝く。心臓の [上の] 月輪の上の比類なきマントラの王を観想し、このように唱え心が浄化された者は常に敬意を持って何度も [唱えるべきである]。その時、マントラの王 [は以下のとおり] である。「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」 [以上が] 大随求明妃の儀軌である。

3. No.197 「聖孔雀明妃成就法」³³和訳

[1] 孔雀明妃の観想

以前に話された方法によって、二重蓮華の [上の] 月 [輪] の [上] において、緑のマーム (mām) 字より生じた孔雀明妃を [観想すべきである]。[その女神の体色は] 緑の色で三面六臂、各々の顔は三眼で、黒 (青) と白い左右の顔で [ある]。右の三つの手において順番に、孔雀の尾羽、矢 [を持ち]、与願印 [を結び]、同様に左の三つの手において、宝石の山、弓、ひざにある水瓶 [を持つ]。きらびやかな装飾品に [飾られ]、美しい味 (愛情の情趣³⁴) で、新鮮な若さで、月輪の [上の] 座において月の輝きを持ち、半跏坐に坐す女神で、不空成就如来の王冠 [をつけた女神] を自分自身に知覚 (観想) すべきである。

[1] 孔雀明妃の観想
[2] 4つの文字の観想
[3] 真言

SM No.197
「聖孔雀明妃成就法」内容構成

[2] 4つの文字の観想

その時、これらの女神たちを、頭とのどと心臓と心臓に準じる部分の月輪において、以下のような順番で、オーム、アーハ、マーム、フームという、四つが集まった文字を認識させ、拡張収斂をなすべきである。

[3] 真言

そこで真言を読誦すべきである。「オーム、孔雀明妃よ、知識の王妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」以上が聖なる孔雀明妃の成就法である。

4. No.198 「聖大千摧碎明妃成就法」³⁵和訳

[1] 大千摧碎明妃の観想

以前に話された方法によって、二重蓮華の [上の] 月 [輪] の [上] において、ブム (bum) 字より生まれた大千摧碎明妃の自性を観想する。その後、白い一面で、六臂で、右の三臂によって剣・矢 [を持ち]、与願印 [を結び]、左の三臂によって弓・

33 [Bhattacharya1968b: 234]

34 [Bhattacharya1968b: 234] displays the sentiment of passionate love

35 [Bhattacharya1968b: 217]

絹索・[鉄製の] 斧 [を持つ大千摧碎明妃を觀想する]。きらびやかな装飾を持ち、美しい若さと愛を持ち³⁶、そこに大日如來の王冠 [を持ち]、蓮華の [上の] 月 [輪] の [上] に座り、[月のように] 輝く。以上が聖なる大千摧碎明妃の成就法である。

5. No.199 「聖密呪隨持明妃成就法」³⁷和訳

[1] 密呪隨持明妃の觀想

密呪隨持明妃は、一面四臂で、[女神の体色は] 黒で [ある]。右の二臂において、金剛を持ち、与願印 [を結び]、左の二臂において、斧と絹索を持つ。[彼女は] フーム (hūm) 字の種字 [から生じた女神] で、阿闍佉の王冠 [をつけた女神] で、日輪の座で輝いている (太陽のような輝きの上に座る)、と [言う]。以上が聖なる密呪隨持明妃の成就法である。

6. No.200 「聖大寒林明妃成就法」³⁸和訳

[1] 大寒林明妃の觀想

大寒林明妃は、一面四臂で、[女神の体色は] 赤で [ある]。右の二臂において、数珠を持ち、与願印 [を結び]、左の二臂において、心臓の方向に向けた金剛鉤針と、書物を持つ。[彼女は] ジーム (jīm) 字 [から生じた女神] で、阿弥陀佉の王冠 [をつけた女神] で、半跏坐に坐し、様々な装飾を持ち [に飾られ]、日輪の座の輝きである [日輪に坐し、太陽のように輝いている]、と [言う]。以上が聖なる大寒林明妃の成就法である。

7. No.201 「偉大な五護陀羅尼儀軌」和訳

[1] 五護陀羅尼の觀想

[1.1] 大隨求明妃の觀想³⁹

伝統的な方法で、五尊の偉大な女神たち [の觀想] を述べよう。その場合、大隨求明妃は、[体色が] 黄色で、三面で、各々の顔は三眼で、十臂で、[中央の面は黄色で、] 黒 (青) と白は [それぞれの] 左右の顔 [の色] で、右の五臂において、以下のような順番で、劍・金剛・矢・与願 [印を結び]、心臓の近くで傘を手を持ち、同様に左の五臂において、弓・旗・宝石の

[1] 五護陀羅尼の觀想
[1.1] 大隨求明妃の觀想
[1.2] 孔雀明妃の觀想
[1.3] 大千摧碎明妃の觀想
[1.4] 密呪隨持明妃の觀想
[1.5] 大寒林陀羅尼の觀想
[2] 眞言

SM No.201

「偉大な五護陀羅尼儀軌」内容構成

36 [Bhattacharya1968b: 217] displays the sentiment of amour.

37 [Bhattacharya1968b: 200]

38 [Bhattacharya1968b: 153]

39 [Bhattacharya1968b: 243-244]

山・斧・法螺貝 [を持つ]。宝生如来の王冠 [をつけた女神] で、青黒い鎧兜と赤い上着 (スカーフ) で、半跏遊戯坐に坐し、光り輝く装飾品や衣装に飾られた、と [言う]。

[1.2] 孔雀明妃の観想

孔雀明妃は、[体色が] 緑で、一面二臂で、光り輝く孔雀の尾羽と与願印を右と左の腕に [持つ]、と言う。

[1.3] 大千摧碎明妃の観想

大千摧碎明妃は前述のような女神である⁴⁰。

[1.4] 密呪随持明妃の観想

密呪随持明妃は一面四臂で、[体色が] 黒で、右の二臂において、剣 [を持ち] 与願印を [結び]、そして左の二臂において、斧と羂索を [持つ]、と [言う]。

[1.5] 大寒林明妃の観想

大寒林明妃は、一面四臂で、[体色が] 赤で、右の二臂において剣と与願印を [持ち]、左の二臂において、斧と羂索を [持つ]、と [言う]。

[2] 真言

自身の名前に結びつけられた、自身の種字の中央にある三字の印⁴¹は、彼女たち (五護陀羅尼明妃) の真言である。[以上が] 偉大な五護陀羅尼の成就法である。

— 参考文献 —

- 大塚伸夫2013 『インド初期密教成立過程の研究』 春秋社。
奥山直司2006 「成就法の花環」松長有慶『インド後期密教 [上] 方便・父タントラ系の密教』 春秋社
木村秀成2018 『『マハープラティサラー (大随求陀羅尼經)』におけるダラニの尊格化について——宝思惟訳を中心に——』、『大正大学大学院研究論集』42号, 44-72。
佐久間留理子2011 『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林
園田沙弥佳2014a 『『成就法の花環』におけるマハープラティサラー成就法』『東洋大学大学院紀要』50, 東洋大学大学院, 101-123。
——. 2014b 「『サーダナ・マーラー』における五護陀羅尼の成就法」『印度學佛教學研究』63 (1), 日本印度学仏教学会, 435-438。
——. 2015 「『サーダナ・マーラー』No.206「五護陀羅尼成就法」について」『東洋大学大学院紀要』51, 東洋大学大学院, 127-147。
——. 2017 「『成就法の花環』*Sadhanamala*における大寒林明妃成就法」『印度學佛教學研究』66 (1), 日本印度学仏教学会, 368-371。
立川武蔵1987 『曼荼羅の神々—仏教のイコノロジー—』ありな書房。
——. 2009 「『完成せるヨーガの輪』研究 (三)」『人間文化 (24)』愛知学院大学人間文化研究所。

40 「前述」について具体的な記述はないが、本成就法に述べられている他の明妃 (孔雀明妃、密呪随持明妃、大寒林明妃) の特色がSM中のそれぞれの単独の成就法 (No.197, 199, 200) に説かれている特色と共通していることから、No.198「聖大千摧碎明妃成就法」を指していると思われる (詳しくは本論文2.1.2「No.201とNo.197〜200に関する考察」を参照)。

41 三字についての具体的な記述はない。

- 田中公明1992 『曼荼羅イコノロジー』平河出版社.
——. 2004 『両界曼荼羅の誕生』春秋社
——. 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社.
田中公明・吉崎一美1998 『ネパール仏教』春秋社.
塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編1989 『梵語仏典の研究IV密教經典編』平楽寺書店
東京国立博物館2015 『特別展コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流』
日本経済新聞社.
森雅秀2017 『仏教の女神たち』春秋社.
頼富本宏・下泉全暁1994 『密教仏像図典』人文書院.
Bhattacharya, Benoytosh (ed.). 1968a. *Sādhnamālā* vol. II. Baroda.
——. 1968b. *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta.
——. 1972. *Niṣpannayogāvalī*, Baroda.
Bhattacharyya, Dipak Chandra 1978. *Studies in Buddhist iconography*. New Delhi.
Kim, Jinh. 2010. A book of Buddhist Goddesses: Illustrated Manuscripts of the *Pañcarakṣā sūtra* and their ritual use. *Artibus Asiae*, Vol. 70, No.2. 259–329.
Lewis, Todd T. 2000. *Popular Buddhist texts from Nepal : narratives and rituals of Newar Buddhism*. State University of New York.
Matsunami, Seiren (comp.). 1965. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library* (『東京大学附属図書館所蔵 梵文写本解説目録』). Tokyo.
bSod nams rgya mtsho, Tachikawa, Musashi. 1989. *The Ngor Mandalas of Tibet Plates*. Tokyo: The Center for East Asian Cultural Studies.

キーワード：五護陀羅尼、パンチャラクシャー・マンダラ、インド後期密教、*Sādhnamālā*、*Niṣpannayogāvalī*